

Title	吉田良三著 工業簿記と原価計算
Sub Title	
Author	山田, 正夫
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1929
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.23, No.2 (1929. 2) ,p.326(150)- 331(155)
JaLC DOI	10.14991/001.19290201-0150
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19290201-0150

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

吉田良三著『工業簿記と原價計算』

山田正夫

著者は本書刊行の理由を次の如く聲明してゐる。曰く、『多年職業的會計士の實務に従事する知人、嘗て予に告げて曰く、我企業界に於ける計理上の二大缺陷は、シヤンド式銀行簿記が銀行以外の諸企業に迄不適當に應用され居ること、多數の製造會社が其内部製造過程を記録する眞の工業簿記を採用し居らずして、偶々原價計算が行はれ居りても、それは會計部の簿記と何の連絡もなく無關聯に行はれ、其計算が一切複式簿記に依て統制管理され居らざるとの二點に存すと。他面に於て方今我國には商業簿記及銀行簿記に關する著書の非常に多きに反し、工業簿記に關する文献は猶極めて寥々たり。……以上二つの事實はこゝに予の近業として本書を世に出すことの決して徒爾ならざるを證すと信ずるものななり。』(序一—二)と。而して斯くの如き著者の意圖は空しからず、その勞作の結果として誠に寥々たると同時に甚だ貧弱なる工業簿記文献中に、良書として尊重するに足るべき本書の完成を見るに至つたのは全く慶賀すべきことであつて、之を實際的方面にしては現時に於ける工業會計上の缺陷を矯正する爲の指南車となるべきこと勿論、やがては又近來漸くその要求の熾烈となりつゝある經營合理化乃至能率増進等の依つて以つて根據とせざる可からざる企業會計制度の確立に對しても有益なる暗示を齎すに至るであらうと思ふ。

更に又著者が本書の全般に亘つて常に工業簿記と原價計算とを明確に峻別すると共に、その相互關係を考慮の裡に置いて如何にして兩者の聯絡を圖る可きかに就いて周到なる解説を施してゐるのは、嚮に掲げたる著者の本書執筆の理由に徴して元より當然のことと考へられるであらうが、而も本書に於ては此の當然なる一點こそ實にその最大の特長を形づくるものに外ならない。抑、在來に於ける我國の工業會計に關する著書の殆ど總て——と云つても僅々十數種に過ぎないが——に於いて、將又世人一般の概念上に於いて、工業簿記及び原價計算なる二個の名稱はその意味する所の内容甚だ曖昧であつて、甚しきに至つては往々兩者を以て全く同義語と解するには非ずやと疑はるゝ場合さへあり、試みに工業簿記と題する書籍を取つて見れば、或は劈頭第一に原價の意義を糺して原價計算を説き來り、或は一應工業簿記に對する定義を與ふるも、之が原價計算との關係に至つてはその見解甚しく杜撰に止まつて、その頁數の大部分を擧げて専ら原價計算の説明に充當し、又反對に原價計算と稱する書籍に就いて見るも同様の不滿は免れず、たとひ之が一般會計部との關係に解説を及ぼすと雖も其の根柢に於いて確乎たるもの無きが故に甚だ至らざるの感なきを得ざるが如き有様であつて、遂に未だ此の兩者の間に明瞭なる分界の劃されたるものあるを見ないのである。著者は本書に於いて此の既に當然明かにせられざる可からざりし問題に對して明快なる解釋を與へたのであるが、之に依つて工業簿記の進むべき方向が決定し、原價計算の占むべき地位も亦確立するに至つたことは、如何なる見地より見ても誠に有益なことと云はねばなるまい。

著者は先づ工業簿記を定義して『工業簿記とは製造及販賣を目的とする企業が、製造過程及販賣過程に因て其財産に受くる變動を繼續的に記録し、以て其結果を明かにする様複式簿記の應用されるものなり。』(一—二)と考へる。『商業簿記は販賣其他外部との間に生ずる取引を記録すると共に

企業全體に關する財政的記録をなすものなるが故、製造業の會計に就ても亦之に依て全製造に係る原價を總括的には處理するを得る。(二)のであるが、個々の製品原價、製品の各部分に係る原價、乃至製造の各階梯に於ける原價等を明かにし、或は又完成品乃至中間製品の價格と仕掛品の價格とを區別せんとするが如き場合には、商業簿記のみを以てしては能く其の要求を充たすことを得ずして、茲に原價計算なるものゝ必要を生ずる。故に原價計算を複式簿記に取入るゝことに依り工業簿記が初めて成立する(三)のであつて、其の任務とする所は必竟、工業特有の内部製造活動の記録に當る特別任務と、全然商業簿記に異らざる對外商業活動の記録並びに損益計算及び貸借對照表計算を掌る一般任務との二つに歸着するのである。(六)七)而かも特別任務に係る記録は一般任務に係る記録に比し遙かに複雑且つ困難なるものにして、工業簿記の此部分は其外部生活を記録する簿記が商業簿記と稱せらるゝに對し、工場簿記又は製造簿記を唱ふべきものなり。(七)となす著者の見解は同じ著者が舊著「工場會計」なる一書に於いて「工場會計とは……工場にて材料を受入れ之に種々の製造作業を施して製品となし、販賣部に引渡す迄の間に生ずる一切の收支を計算して、各製産物の原價を見出すに必要な記録方法、及び之が事業全體を整理する會計帳簿へ如何に統轄表示さるゝかを研究するものなり。故に工場會計は其目的に於て普通に所謂原價計算に外ならず、(一)工場會計(二)云々と説ける所と併せて、多少修正の餘地なきに非ざるも大體に於いて其の觀察の肯綮に當れるを察知せしむるものと云へよう。従つて又著者が勘定及補助記録論の敘述に充てたる本書第三編を以つて「工業簿記の實質をなす部分なり。」(序三)と稱する所以も亦自ら承認せらるゝのである。併しながら工業簿記と原價計算とが至極緊密なる相互關係を有することは元より言を俟たざる所である。たとひ「簿記の特徴が期間計算たり又總括計算たるに對し、原價計算の特徴は之が對象計

算たり又分解計算たるに於て、兩者は本質的に相違し從て其計算記録の組織及技術を異にす」とは言へ、兩者共に工業計算制度の分岐たる點に於て異なる所なきのみならず、「簿記は經營を財産計算及損益計算に依つて把握し原價計算は之を原價の計算に依て把握する」といふ點に於いても此の兩者は全く共同の目的の爲に存在するものは外ならぬのであるから、(一)簿記は原價に基いて財産成分の變化又は其の價值移動を總括的に勘定組織に依つて記録し、(二)從つて其の記録は製造原價に關する限り原價計算の報告に基かねばならず、(三)簿記の特徴たる自己管理の機構に依つて原價計算の行ふ個別計算を管理すると共に、(四)兩者一致協力して損益の算定に當る等の場合に於いて兩者の間に接觸を生ずべきことは自明の理である。即ち著者が「簿記と原價計算とが相互に密接なる有機的關係を有することは明かにして、或一派の學者が稱ふる如く兩者を以て全然無關係なる二つの計算制度と見ることは正しからず。」(三二二)との斷案に到達せし根據は茲に存するのである。既に記した様に本書の特色は大凡以上の如き根本概念に依つて一貫統制せられてゐるといふ點に存するのであるが、此の一事は一見甚だ簡單容易の如くにして實は然らず、全く著者の如き斯學に造詣深き人にして始めて能く成就するを得たものと云はねばならない。猶ほ著者の斯かる根本概念の構成に際しては、他の二三の點と共に Die Fabrik-Buchhaltung の著者 Calmes の所説が大體そのまゝ受け繼がれてゐるものと見ることが出来る。

分量の點から見れば本書は決して工業簿記の全般を詳細に取り扱ふに足る程の大冊とは云ひ難いが、適切簡明なる記述に依つてよくその内にあらゆる重要な項目を包含せしむると同時に、獨立の簿記書たらしむる體裁上一般簿記の要領をも收容して餘す所なき手際と、必しも實務に懇切なりとはせぬが、一般理論と共に之に關聯する計算技術の要點を傳ふるに力を致し、其間常に批判的態

度を持ちて忘れざりし用意とに對しても、吾人は著者に向つて讃辭と敬意とを表呈すべきであると思ふ。

本書の體系を一應紹介して置くならば、凡て四編、先づ第一編は、工業簿記の意義に筆を起してその特色、任務等に及ぶ「總説」、一般簿記の概念を簡單に與へんとする「複式簿記の原理」、及び簿記と原價計算との關係の三章より成る「序論」となし、第二編を以ては専ら「原價計算」の解説に充て、「原價及代價」「原料」「勞銀」「間接費」「補助經營」の諸章を経て「原價計算法」なる一章の下にその技術的説明を展開し、最後に「原價計算に必要な書式」てふ章を加へて之を補ふのである。

所謂「工業簿記の實質」たる「勘定及補助記録」に屬する第三編に於いては、先づ工業簿記の勘定を二分して製造部關係の勘定と營業部關係の勘定とに別ち、後者は商業簿記の一般と同一なるを以て「勘定總説及商業關係勘定」の章下に其の大要を摘記するに止め、前者は之を更に固定資産勘定、原料關係勘定、勞銀關係勘定、間接費關係勘定、原價計算勘定、製品勘定、副製品勘定、賣上勘定なる七種に大別して、各勘定毎に夫々一章を設けその解説並びに記帳法を縷述するに充て、ゐる。第四編は「帳簿及決算」と名けられ、専ら工業簿記を主として記述せる「帳簿」及び「決算」の二章と、二個の例題に就いて帳簿記入の様式を示せる「記帳例示」なる一章との三章より成り、かくて本文を終れば二頁に亘る參考書の列擧と七頁に及ぶ索引とが卷末に附加せられてゐるのを見る。

著者には工業簿記に關して他に「工業簿記」及び「工場會計」なる二舊著があるが、前者に就いては著者が「本書は其内容に於て同書（「工業簿記」）とは全然異なるものにして、唯記帳例題の一部が残されたるに止まり、其他は殆んど舊著の片鱗だに留めざるものとす。」（序二）といふてゐる通りであり、豫て改訂中なる由を傳へられつゝありし後者は、「原價計算の純理に關しては別に原價計算原理なる一書を公刊せんと期する。」（序三）といふ著者に依つてやがて舊套を脱して我等の前に現はれることであらう。而して茲に紹介した「工業簿記と原價計算」なる新著こそは、類書中の白眉として、一般簿記會計文献中に於ける著者の著名なる「近世簿記精義」と同様の地位を、工業簿記會計書中に於いて占むるに至るであらうと云ふも決して不當ではないと考へる。

（菊版横組天金布装三九〇頁 三四五十錢）
昭和三年十二月、同文館發行